

そしてジジになる

谷口吉光（秋田県立大学）

去年生まれた孫娘が先日 1 歳になりました。「谷口さん、孫はかわいいぞ」と周囲の同年代の友人から言われていたので、「さぞかわいいものなんだろう」と心の準備はしていたつもりでしたが、いざ生まれてみると「なるほど、これはめんこい！」と心の底から納得しました。

娘夫婦が近くに住んでいてほぼ毎週孫を連れて遊びに来るので、生まれたばかりの赤ん坊がよちよち歩きをするまでの 1 年間をドキュメンタリー番組のように見ることができました。特に、今年のお正月に、おぼつかない足取りで歩いていた孫が小さな声で「ジジ」と私を呼んだ時、「そうか、オレはこの子のジジなんだ」と深く感動しました。

「孫が生まれれば自分はおじいさんになる」というのは、ただ頭の中で考えていた話ですが、「孫にジジと呼ばれたら、自分はジジになるしかない」というのはその時私が考えた（大げさに言えば覚悟した）ことでした。言い換えると、「この孫のためによい爺さんにならねば」と思いました。

そう決心すると、懸命に子育てをしている娘夫婦の姿が数十年前の自分たち夫婦の姿に重なって見えてきました。「あんなことしているよ」「私たちの頃と時代が違うよね」などという私たち夫婦の思い出話にも花が咲くようになりました。

それだけでなく、今の娘夫婦が昔の自分たちだとすると、今の私たちは昔の私たちの親たち、祖父母たちだということになり、改めて亡くなった父や祖父母、親戚などを思い出し、「自分が生まれた時、父さんもこんな風を感じただろうか」と自分の思いを亡き父に重ねてみることも増えました。

それはあたかも、孫が生まれたことによって、人生という家で家族全員が 1 階ずつ上の階に引っ越さなければいけなくなったようなものです。1 階は孫のもの、子どもだった娘は親が住む 2 階に引っ越し、私たちはジジババが住む 3 階に。その上は？ う～ん、やっぱり「お迎え」という話になるのか。まだ実感はありませんが、いずれそうした心の準備もできてくるのでしょう。

こうして、かわいい孫のおかげで、私はこの社会が世代から世代に受け継がれる「いのちのつながり」でできていることを自分事（じぶんごと）として学びました。「そんなこと、昔から決まっている」ことではありますが、子どもを産んで育てることも当たり前ではなくなった時代に、世代を通じたいのちのつながりの中でしか、私たちの家族や社会は持続することができないという真実を改めて確かめたいと思って、ジジになった思いを披露しました。

（北羽新報「トランジションの風」 2018 年 4 月 8 日掲載分に加筆・修正した）